

尾崎雄二郎著

〔東洋學叢書〕

中國語音韻史の研究

刊行 創 文 社

尾崎 雄二郎（おごき・ゆうじろう）

1926年東京に生まれる。1951年京都大學文學部卒業。京都大學教養部教授を経て、現在京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センター教授、同主任。本書第一部の研究により京都大學文學博士。

〔主要著書〕「和語と漢語のあいだ」（共著）筑摩書房、
「譯注説文解字注」（編）東海大學出版會。

〔中國語音韻史の研究〕

昭和五五年二月二九日 第一刷發行
昭和六一年二月二八日 第二刷發行

定價五五〇圓

著者 尾崎雄二郎

發行者 久保井理津男

東京都千代田區一番町一七十三

印刷者 中内康兒

東京都文京區關口一四一八



發行所

東京都千代田區
一番町一七番地

株式會社 創文社
〒102 電話東京二六三一七〇（代表）
振替東京二一九二四七二

落丁・亂丁本はおとりかえいたします

資料はいつも孤獨である

—序にかえて—

大相撲の呼出しは東方の力士を、ただ「ヒガアシ」と呼び出していると思つてはいけなないので、その氣になつて聞いて見れば、それは實は「ヒガアイ、シ」なのであることがすぐにわかるだろう。

もっともそれは、五十音圖でことのすむこうした母音の體系をもっているわれわれの耳にはそう聞こえるというだけのことなのであつて、「ヒガア……」のガの部分の母音をかりに a であるとする、そこからイに到るつなぎとしてアであらわされた部分は、實は a→æ→e→e をかなり急に駆けぬけてイ、すなわち i に行き着く忙しい舌の運動である。

こうしたことは、ヒ、ガ、シ、といった調子に一字ずつに發音される場合を除けば、日常の言語生活の中でも氣づかれないままに經驗されていることなのであつて、それが呼出しとなると、全體として間延びしてくるうえ、一音節ごとに力を入れる、逆にいえば一音節ごとに力を抜くということがなく、全く同じ力が全體の部分に配當されるために、明らかな聲として耳立つてくるのであるに過ぎないのだが、なぜこういうことが起きてくるかといえ、要するに人間が、通常はいくつかの音の集まりである一つ一つのことばを發音するときに、たとえばヒガシでは、いま言ったようなヒ、ガ、シ、式の發音をすることはきわめてまれで、通常ヒをいうときにはすでに次のガの、ガをいうときにはすでに次のシの發音の準備に取りかかっているとでもいい、いや本當はもっと

ヒ、ガ、シの各音は密接に聯關しあっているので、先頭のヒをいうときに、すでに實はそれが、ガ、シ、によって伴われるという展望のもとにそれがいわれているといつてもいい、そういうことのためなのであつて、たとえばヒガシの場合、ガの母音は最も口の開きの廣いaであつて差し支へはないのだが、實際には口の開きが最も狭い母音をもつ次のシに引かれて、ヒガシと連續していわれるときのそれは、せいぜいさきにも書いたようなaに止まると思われる。

今年（一九七二年）の六月二十七日、大阪朝日の夕刊に、福山敏男博士が、「羅城門の讀み方」について書かれた短い文章に興味をひかれた。

結論の一部を引用させていただくと、

結局「らいせい」という古代式の讀み方と、「らしょう」という中世式の讀み方の二系統があり、前者はいま全く消滅している

ということになるのだが、中間資料としては、かならずしも確かではないらしい「らせい」や、博士によつて「過渡的な讀み方」と考えられた「らいしゃう」などの讀みもあげられている。

ここにある「らいせい」「らいしゃう」などの「らい」の「い」は、さきに取り上げた「ヒガイシ」の「イ」である。

「せ」のようなエ段の音の後續することが、「らい」の「い」のようなイ段の音を生むことはおかしくも見えようが、ほかに例がないではない。

この間、近くの子供たちがジャンケンをするのを聞いていると、どうしてもそれが「ジャイケンボン」と聞こ

えるのであった。子供たちが「ジャンケンポン」といつているのが、私の耳には「ジャイケンボン」とも聞こえる、というのでは、どうもないようであった。ジャンケンも、相撲の呼出しのごとく、息を切らずに唱えることが少なくない。……ケン……のケに引かれて、ジャンのヤンの部分は、母音でいうと $a \rightarrow \text{æ} \rightarrow e \rightarrow e$ という忙しい経過を取ることになる。東京などのジャンケンの場合、ここにいま最初のンであらわされている部分は、たぶん e が鼻音化された形であるだろうが、こうした掛け聲がすでに出来上がったものとしてこの地方に移入されたとき、その鼻音である性質を落したものと思われる。それが「らいせい」の「らい」の「い」のごとく、ここでも「ジャイケン」と「イ」であるのは、ここにア段とエ段とのつなぎの音として生み出される（私は近ごろ析出されるということばを使って表現しているのだが）ものが、本来はエであったとしても、われわれの言語の體系の中で、今も昔もア段イ段の接續のほうが、ア段エ段の接續に比べて數量上、したがってはまた出現の確率上、壓倒的に高いという事情の中でイ音に聞き取られてしまうというのではなかったであろうか。

ただ、これはいずれの場合についてもいえることだと思うが、音連鎖の中にこうした音が析出してくるためには、それを中に含み込む全體の音連鎖が、いわば事情を知られずに唱えられるという条件が必要で、羅城が「らいせい」であるためには、それが、文字のない民衆によって、「ら」の羅と、「せい」の城との連鎖とは知られずに、唱えられるという条件が、やはり必要であったように思われる。つまり、もうすでに出来上がった名を、與えられたものとして「らせい」「らせい」と唱えまわることが、やがてそれを「らいせい」に定着させた原因であつたろうというのである。ということはつまり、この門の命名者にとってそれが「らせい」であつた可能性がやはり高からうということ、したがってこの門の最も古い読み方は、あるいは少なくとも「らいせい」という読み方を生み出したものは、理論的にはやはり「らせい」であるべきだというのである。

しかしそれが民衆の、いわば無知の唱え方の生み出したものであるからこそ「らいせい」と、形あるものとしてみずからを保存したその同じ理で、「らせい」という・いわば知る者の唱え方は保存されにくからう。書證の、これからも出現してくることを期待したい假説である。

禪家の語録は、知らざる者の書寫でもなかりうに、その拘われることのなさがおそくは大きな力となって、中國口語史の缺くべからざる資料となることが多かった。

いまは「什麼」という形に定着している疑問詞・何物を意味するものの古形「是勿」をその中に含むことによつて、神會じんね和尚語録の名が言語史家によつて記憶されるのは、その顯著な例の一つである。

「資料」は、しかしいつも孤獨である。それは確かにそこにあつても、原則としては、既往を語らず、來者に言及しない、と私などには見える。

言語史が資料収集の作業と信じられることを、私は嫌う。私にとって言語史の資料とは、ある意味で恐らくすでに充分なのであつて、そこに缺けているのは新しい材料などでなく、實に新しい視點なのでなければならぬ。もちろん新しい材料、新しい資料の出現を、私が嫌い、拒否するわけではない。ただそれらのものは、さきにある視點によつて見通され、豫期されていたものが、かならずしもいつも期待はできない僥倖、賞與として、與えられるものでなければならぬ。

本當は、われわれもまた、説明するのではなくて、變革すべきなのである。

しかし、人は私のような語學を嫌う。それは科學でなく、禪の語録のようなものだという。もちろんそのとき、それは惡口としていわれているのである。

目次

資料はいつも孤獨である(序にかえて)..... i

第一部 中國語音韻史の研究

一 ある語序について(口頭發表要旨)..... 五

二 「吾」・「我」の使い分けについて..... 一四

三 「上古漢語」の複聲母について..... 二六

四 來母再説..... 四六

* *

五 等韻圖三等についての一つの考え方..... 五七

六 漢語史における梵語學..... 七

七 切韻系韻書における韻の排列について..... 一〇〇

八 切韻における鼻子音韻尾の處理について..... 一〇九

九 切韻の規範性について..... 一四二

十 中國語音韻史の研究——三島海雲記念財團への研究經過報告..... 一五三

* *

十一	大英博物館本蒙古字韻札記	一七
十二	反切から見た集韻の問題點	一八
十三	「沈黙」の語學	二〇
十四	disarticulationとこうご	二二

第二部 中國語音韻史研究の周縁

十五	中國語の「受身」をどう考えるべきか	三五
十六	仁の詞性に關する隨想	三四
十七	書評・彭楚南譯コンラッド「論漢語」	三六
	* *	
十八	日本古代史中國史料の處理における漢語學的問題點	三六
十九	邪馬臺國について	三九
	* *	
二十	國語における詞辭の分類について(一)	三二
二十一	國語における撥音、促音、および長母音を音聲學的に觀察するための作業假説	三三

目 次

あとがき	三
掲載誌一覧	三
事項索引	174

中國語音韻史の研究

第一部 中國語音韻史の研究

一 ある語序について（口頭發表要旨）

以下は、一九五四年三月二十七日、京都大學人文科學研究所で開かれた中國語學研究會關西例會の席上、上の標題で行なつた發表の前半である。（補）ここでは、それらしきことに、全く説き及んでいない。後半を刪つたのは、語序の問題に觸れたその部分が、頗る未熟であると、指摘された方々の批判を受け入れた結果である。

先秦の諸文獻に、如何、若何、奈（奈）何等、一連のことばのあらわれ方を見ると、そこにはある定まった相互關係がある。ごく大ざっぱに言うと、これらのことばのあらわれ方によって、先秦の諸文獻はA B二群に大別され、A群には如何が、B群には若何と奈（奈）何とが、あるいはその一方のみが、あらわれる。A群には詩經、論語、孟子、易等があり、B群には墨子、荀子、莊子、老子、屈原の賦等が屬している。そしてA群では、ゴトシと訓ぜられることばは如と書かれることが多く、同じことばがB群にあっては同じく若であることから、この如何と若何・奈（奈）何との、あらわれ方の差は、すなわちある言語群と、その言語群での如の、音韻的表現が若であるような、他の言語群の對立した存在を示すものだと考えることが許されよう。（1）

この異なつた二言語群（少なくとも書記の上の）の存在は、すなわち方言の存在に支えられた事實であらうとは、當然想像されるところだが、それはさしあたっての問題でない。

問題は、A群の如何と、B群の若何、秦(奈)何との関係いかんということであるが、これはたとえば日本語について見た場合、大根ーダイコンの音韻がデエコンであるような言語集團があれば、そこでは橙ーダイダイのそれも、同様にデエIIとなるべきであり、特にそうなることを妨げる理由の存在しない限り、決してダエIIとも、ディIIともならない、というのともよく似て、ゴトシをあらわすのが如でなく若であるようなある言語集團では、如何の如も、若でなければならないようである。つまりA群の如何は、全く過不足なしに、B群の若何に等しいと言えそうである。ところでここに秦(奈)何を落したのは、故意にであつた。というのは、B群の中にあつて、秦(奈)何は、ある場合には若何に等しいが、他の場合にはそのあらわれ方を異にするからである。このことは、如何、若何とは語序を逆にする何如、何若というような表現があるに反して、秦(奈)何には、同様な何秦(奈)ということばが、おそらくは誤用にもとづくであろう後世の詩などには見えても先秦の諸文獻には全くあらわれない、ということからも、豫想できることだ。

私はこの秦(奈)何というのは、若何の音韻上の變種だと考える。つまり、若と何とが、間になにもはさまずに、直接してあらわれた場合、特定の方音區域においては必ず起きる音變化が秦(奈)何と、書き分けられたものと想像する。

さて、B群諸文獻での、若何、秦何等のあらわれ方を數で示すと次のようになる。

墨子	秦(奈)何	20	例	若之何	3	例
荀子	秦(奈)何	7	例	若何	6	例
如之何		1	例	莊子 秦(奈)何	15	例
若何		3	例	若之何	8	例

奈……何

3 例

老子 奈何

2 例

このうち莊子を、主として莊周の手筆に出たであろうとされている内篇に限定すれば、次のようになる。

莊子内篇 奈何

4 例

若之何

1 例

奈之何

1 例

これらのうち、私の推定を證據だてるのに最も純粹な例を提供するのは墨子である。すなわち、ここでは、奈(奈)何があつて若何がない。若何は、この場合には、つねに音變化を起して奈(奈)何に變つたと考えられる。そして若と何との間に、他の音、この場合、之が入つて、はじめてこの音變化の遂行がはばまれ、若之何と、若は、若のままにのこつたものにちがいない。

荀子に一例だけあらわれる如之何は、楊倞も

此篇蓋弟子雅錄荀卿之語、皆略舉其要

と注した大略篇に見えていることでも、その言語的純粹性は疑うに足り、しかもそれが

天子即位、上卿進曰、如之何憂之長也、能除患則爲福、不能除患則爲賊、授天子一策……(福、賊、策恐らくは韻)

というようならわれた方をしていることは、いっそうよく、この如之何が、特別な一例であり得ることを示すだろう。さらに若何の六例また

子路入、子曰、由、知者若何、仁者若何、子路對曰、知者使人知己、仁者使人愛己、子曰、可謂士矣、子貢入、子曰、賜、知者若何、仁者若何、子貢對曰、知者知人、仁者愛人、子曰、可謂士君子矣、顔淵入、子曰、